

2015年2月21日(土) 13:30~16:00
日本バプテスト連盟宣教師部 教会音楽室
第6回賛美歌検討委員会議公開講座
於 日本バプテスト教団日ヶ丘教会

教会をつくり上げる賛美歌の言葉 — 天皇制用語をめぐって —

石丸 新

1. 「ミイツ」を耳にして何を思い浮かべるか

● 賛美歌に歌われる「みいつ」

1954年版讃美歌7番「生のみいつとみさか光とを このかざりたたえて」を聞いて、「みいつ」を三位一体のことと思った人が。新生讃美歌3巻では「あがめまつれ うるわき主 哥えまつれ み栄え」とあり、「みいつ」を避けた (Tr. 2003)。

別の曲だが、日本福音ルーテル教会 教会讃美歌127番に「さかえに輝く^{みいつ}三一の神よ」とある。

別の曲、新生讃美歌343番では、「とわにほめたたえん^{みいつ}三一の神を」
「三一の神にぞ^{みいつ}み栄えあれ也」と歌われる。

● 唱歌「明治節」で出会った「アジア」ヒ「みいつ」

明治節 堀澤周安

一 アジアの東 日いつとこ
聖の君の 現われまして
古き天地ととせむ雲霧を
大御光に 照なくはうい
教えあまなく 道明うけく
治り給える 御代尊

二 恵みは 八洲にあまり
御威の風は 海原越えて
神の依させる 御業を 弘め
民の栄ゆく 力を 展げし
外国の 史にも 著く
留の 給える 御名を 畏

三 秋の空あめ 菊の香高き
今日の日よき日を お祈りぞ
定めましける 御業を 崇め
さとしあしける 詔勅を 守り
代々木の森の 代々とこしえに
仰ぎ 奉らん 大御

※ 明治大帝を記念する為の、誕生の日
11月3日を「明治節」と定めた。昭和
3年から19年まで祝われた。

● 「みいつ」の表記と語義

後威の尊敬語が御後威。ただし後威だけ「みいつ」と読んでいた。古くは威後とも書いた。

・「後」は、とがらたかどの意。[例] 後緯 さわたりて神々しいさまを指す。

・「威」も、おごりかさや勢いを意味する。[例] 威厳、威力、威光/「威」を「いつ」と読ぶこと。[例] 威風神社、威原

「後威」は①神聖であること ②威力が強いことを意味する。天皇・神などの威光ないし

威勢を表すが、明治開国期から昭和戦争期にかけては、もっぱら天皇に限定して用いられていた。

[例] 天皇陛下の大御後威 ほとんどの辞典では神を外し、天皇の威光としている。

明治期には威光に「みいつ」のルビを振り、御後威に「ごいこう」のルビを振る例が多く見られた。自由自在。

徳川家の御威光、御威勢、→ 天皇の御後威 (侵すべからざる尊厳、神聖) / 天皇の神格化
(三つ葉葵の紋) 御威威 (菊の紋・日の丸・旭日旗・君が代)
(幕藩体制) (神権天皇制)

[参考] 渡辺浩『日本政治思想史』東京大学出版会、2010年 特に第三章「御威光」の構造
— 徳川政治体制

2. 諸讃美歌集での「おいつ」の用例*

- 1868年(明治1) 天皇節を定め、明治と改元
 1869(明2) 東京招魂社創建
 1871(明4) 戸籍法改正、文部省設置
 1872(明5) 陸・海軍省設置、学制公布、徴兵令発布
 * 1874(明7) 組合教会讃美歌集「カミのおいつをかしこみて」など2曲
 * 1876(明9) 日本基督教会改正讃美歌 1曲「キミが^{おいつ}威光をかしこみあがめて」
 1879(明12) 東京招魂社を靖国神社と改称
 1882(明15) 軍人勅諭を下す
 * 1884(明17) ムンゲス系諸附基督教聖歌集1曲「おいつとかりやき いたるなくまなし」
 1888(明21) 「君が代」日本国歌に
 * " " 一教・組合系新撰讃美歌「エホバのおいつはあやにがしき」など8曲
 1889(明22) 大日本帝国憲法発布
 1890(明23) 教育勅語公布、帝国議会開設
 * " " 奥野昌綱和編 童謡讃美歌1曲「皇国の威風をいざやあはさん」
 1891(明24) 小学校祝日大祭日儀式規程制定
 1894-95(明27-28) 日清戦争
 * 1900(明33) 和田秀雄編 謹附新製讃美歌1曲「君が^{おいつ}威風こそいと畏れけれ」
 * 1903(明36) 委員会編 讃美歌「おいつかりや さらき御座も」など27曲、延29回、ほかに讃歌6曲
 * " " 省藩新蔵編 讃美歌「いとたかき、威風の^{おいつ}にぞしたまふ」に加えて「おいつ」2曲
 1904(明37) 国定教科書使用開始
 1904-05(明37-38) 日露戦争
 * 1909(明42) 委員会編 讃美歌第二編(未確認)
 1910(明43) 韓国を併合
 1914-18(大3-7) 第一次世界大戦に参戦
 1931(昭6) 満州事変
 * " " 委員会編 讃美歌「君のおみつを ^{おいつ} さらき威風毛」など31曲、延33回、ほかに讃歌6曲、
 1937(昭12) 日中戦争 聖歌隊用1曲、延2回
 1941(昭16) アジア・太平洋戦争
 * 1943(昭18) 興亜讃美歌「天の日朝の大御威風」など5曲
 * 1944(昭19) 日曜学校讃美歌「御威風の下にたてなすけいりみ候」など2曲
 1945(昭20) 敗戦
 1947 教育基本法公布、日本国憲法施行
 * 1954 委員会編 讃美歌「あめつちをこめて ^{おいつ} 威風たぐいおきまをたえまつれ」など28曲、延30回
 * 1958 日本福音連盟聖歌 85巻に「おいつかいせいとろ ^{おいつ} うたえおいつを」(他は未確認) 541巻にも「おいつを ^{おいつ} 1おみつ」
 * 1967 委員会編 讃美歌第二編「主のおいつをまつ」など10曲
 * 1974 日本福音ルーテル教会 教会讃美歌「カミおいつはとさかにあけり」など8曲
 * " 靖国神社最終廃棄(初埋出は1969年)
 1979 元号法施行
 * 1997 委員会編 讃美歌21
 1999 日丸・君が代法制化
 * 2001 日本福音連盟 新聖歌「おいつの光は 世界を照らしり」など11曲
 * 2003 日本リキス連盟 新生讃美歌「おいつを^{おいつ} 畏れみ ^{おいつ} ほめよイエス」など4曲、延5回、ただし
 * 2006 日本聖公会 日本聖公会聖歌集 実質上は2曲
 " 教育基本法改定
 2007 昭和の日実施
 * 2012 福音讃美歌協会 教会福音讃美歌1曲「たてえよ ^{たて} 類いなき威風 ^{おいつ} たてえよ声も高く」

3. 唱歌と戦時歌謡に歌われた「みいつ」

- 1909年(明治42)近藤朔風編 女声唱歌にベートーベンによる「自然における神の栄光」(合唱曲)

があった。^{あさひ}壮威の神の^{みいつ}積威、^{みいつ}蒼空にとらうき、
海も陸も^{みいつ}讃へ^{みいつ}唱へ、^{みいつ}聴け衆生、^{みいつ}その声。……

※現在高等学校音楽教科書にある由。

[参考] 聖歌689番、新聖歌403番「^{みいつ}諸天は神のつきぬさかえ」曲:ベートーベン 詩19.1

- 1932年(昭和7)12月発行『新訂尋常小学唱歌 第六学年用』(文部省)

18番「^{あまてらすおみかみ}天照大神」3節 ^{みいつ}かがやく御^{みいつ}積威、^{みいつ}あまのあたり、
今も、^{みいつ}むかしも天照うす
^{みいつ}神の^{みいつ}積威といちじるき

- 1941年(昭和16)文部省発行国民学校五年生用『初等科音楽三』p442の「戦友」

^{みいつ}御^{みいつ}積威あまねき大東亜、^{みいつ}朝日の御^{みいつ}積威行くところ、
あんな敵のあるがざり、^{みいつ}撃ちてしまふ、^{みいつ}きみとわれ。

※朝日の御旗=旭日旗:旧日本陸軍の軍旗(明治37制定)
旧日本海軍の軍艦旗(明治22制定)
日の御旗=日章旗(日の丸)

[参考] 1894年(明治27)12月9日の日清戦争祝捷大会を記念して、民間の唱歌「旭日旗」が歌われた。

あさひのみはた	あさひのみはた	全3番のうち1番
さかまく夜の	うみの外	(出典)木下直之『戦争という見世物』
かすみへだつる	国までも	ミネルヴァ書房、2013年、238~39ページ
ひかりからやく	いそほひは	
わがおほ君の	かしこ ^{みいつ} 御 ^{みいつ} 積威	
わがなすうらの	いやたけごころ	
むかしかなさの	あまみさか	
	帝国萬歳 萬歳	

- 昭和の戦時歌謡に躍る「みいつ」——歌を動員した戦争

1932年(昭和7)「爆弾三勇士」4番 われらが上に戴くは天皇陛下の大^{みいつ}積威
1937年(昭和12)「愛国行進曲」2番 臣民われら皆共に御^{みいつ}積威に^{みいつ}副はむ大使命
1937年(昭和12)「愛国の花」4番 御^{みいつ}積威のしるし菊の花 ゆたかに香る日の本の
1940年(昭和15)「出せ一億の底力」1~3各番 一億いざともに御^{みいつ}積威の下 なしくら
1941年(昭和16)「海の進軍」3番 御^{みいつ}積威輝く大空に意気に^{みいつ}羽^{みいつ}搏^{みいつ}く海鷲が
1942年(昭和17)「海行く日本」4番 伸びる日本海から海へ
さう船脚 御^{みいつ}積威の下に

[参考] 辻田真佐憲『日本の軍歌——国民的音楽の歴史』幻冬舎新書、2014年

「『愛国』レコード(昭和6~14年)」えにし書房、2014年

戸下達也『「国民歌」を唱和した時代——昭和の大衆歌謡』吉川弘文館、2010年

小村公次『徹底検証・日本の軍歌——戦争の時代と音楽』学習の友社、2011年

4. 賛美歌集での「みいつ」をどうすればよいか

「みいつ」は、明治開国期以来、神権天皇制と軍国主義とに特化され、純化された特殊な用語である。「みいつ」を耳にして漢字を思い浮かべることは無理で、意味も不明。よって、

- すべて、歌集から除く。集版の段階で留意する。讃美歌21に学ぶ。日本聖公会聖歌集にも。
- 「みいつ」を含む曲を選ばない。また、仮に選んだ場合に、「みいつ」をその場で「ほまれ」や「さかし」に読み替えることで、ことを収めようとしな。あくまでも歌集の改訂に努めべき。
- 2・11、8・15などの機会に、日本のキリスト教会が「みいつ」を用いてきた事実についての学習を深め、平和教育を推し進める。とりわけ、アジアの人びとへの視点を養う。戦後70年の節目は重く大きい。アジアの一員として生きる日本のあり方を確立したい。
- 「みいつ」を反面教師として、これに代わる適切な語を熟考し、真の礼拝を造り上げる努力を重ねる。賛美は神告白。礼拝で詩編歌を用いないにしても、その歌詞に学ぶ。日本キリスト改革派教会のジュネーブ詩編歌には「みいつ」は無い。

【参考】教会福音讃美歌(2012年) 253番 威光・尊敬・栄誉

世界中どこでも 新しい歌をささげよ
主に歌え ほめたたえよ みすくい知らせを告げよ
まことに主は大いなる方 讃美されるべき方
威光と尊敬と栄誉 光栄と力
ただ主だけを 礼拝せよ 天を造り 支えている主

※同歌集で「みいつ」が現れるのは、39番 たたえよ救い主イエスをの(くりかえし)のみ。

たたえよ頼みなき御威 たたえよ声も高く (これは誉れとして欲しかった。)

歴代誌上 29:10-13 に描き出される神の姿に学ぶ点は大きい。(これは、 Westminster 大教理問答 196、同小教理問答 107 の証文聖句)

【新共同訳】偉大さ、力、光輝、威光、栄光、宝、勢い

【文語訳】権勢と能力と栄光と光輝と威光、国、富、貴 ※明治期の文書では、ルビが本文。漢字は振り漢字。

神の尊厳と卓越性を描き出す多彩な語を聖書に見いたす習慣を身に付ける。語訳に目を留める。

尊敬 栄え 威力 輝き 誉れ 主権
威厳 栄光 力 光輝 栄誉
威光 勢い 名誉
光栄

※文語訳での「威威」は、新共同訳では多くの場合、輝きとなった。

上記の語の複合に着目し、その奥行き、深さ、豊かさを味わう。

【例】詩編 21:5 栄えと輝き ←【文語訳】尊貴と威威

詩編 145:5 あなたの輝き、栄光と威光 ←【文語訳】汝のほまれの栄光ある威威

イザヤ 2:10, 19, 21 威光の輝き ←【文語訳】威威の光輝

※文語訳での「光輝」が、新共同訳には「光輝」として残っている。特筆すべき。

「主の神り」の註語について

5. 「ミタマ」を耳にして何を思い浮かべるか

- 容易に思い付く用例は次のとおり。

先祖のみたまを祭る(祀る)、みたまを安置する、戦没者のみたまを定るかに、みたましずめ
「みたま」は、死んだ人の靈魂を指す。尊んで言う語。

- 表記は二通り。

靈: 靈、御靈、靈送り、靈祭り、靈星、慰靈、慰霊... 死者の靈を慰める。

魂: 魂祭り、魂迎え、鎮魂、招魂、御魂... 死者の靈を招いてまつ。明治初年等は、天皇と国のための死をたたえ、後に純く者の規範とした。各地に招魂社を建立し、教育の場とした。

6. 「靖国」にまつわる「みたま」の特殊な用法

- 明治維新前後より、国家のために殉難した者の靈魂を天皇の名において祭る神社が各地に建てられた。東京招魂社は明治2年、九段に創建され、同12年には靖国神社と改称した。以来、この新神社は国民の思想と行動を天皇の下に束縛する国家神道の支柱となった。

他方、全国各地に建てられた招魂社は昭和14年、護国神社と改称した。中央であれ地方であれ、これらの神社は例外なく、臣民を天皇のため、国のために死に赴かせる教室の役割を果たした。異例ともいえる天皇の靖国参拝は、慰霊にとどまることのない「顕彰」を体现するものとなった。

- 靖国神社に祭神として祀られている靈は次のように呼ばれ、今に至る。

国事殉難者のみたま、亡き父の御靈、戦場に散った夫の神靈(神靈とも)、靖国の御靈、靖国の神、靖国の英靈(靈魂の榮稱)、護国の神、護国の英靈、戦友の御靈……

他方、明治以来の戦争が生んできたのは、藩の遺族、軍国の母、靖国の母、九段の母、皇国の母、藩の母、靖国の妻、藩の遺児、靖国の遺児、靖国の子……。

- 修身教科書で教えられた靖国神社

第五期 初等科修身二

(国民学校四年用、一九四三年度使用開始)

〔昭リ〕

「靖国神社」

靖国神社には、君のため国のためにつくしてなくなった人々が、かうして神社にまつられ、そのおまつりごとがおこなはれるのは、天皇陛下のおぼしめしによるものです。

君のため国のためにつくしてなくなった人々が、かうして神社にまつられ、そのおまつりごとがおこなはれるのは、天皇陛下のおぼしめしによるものです。

私たちは、天皇陛下の御恵みのほどをありがたく思ふとともに、ここにまつられてゐる人々の中心義にならうと、君のため国のためにつくさなければなりません。

※ 右の原型を可尋常小学修身書巻四四に見ることが出来る。一九二〇年(大正9)

6. (続き)

● 文部省唱歌に歌われた靖国神社

日小学唱歌集 第三編
(一九四四年・昭17)
第九十一 招魂祭

一、ここに奠る。君が霊。
蘭はくだりて。香に匂ひ。
骨は朽ちて。土をど残す。
招魂祭。うけよ君。

二、此所にまつる。戦死の人。
骨を砕くも。君が為。
国のまもり。世々の鑑。
光りたえせじ。そのいかり。

日新訂事典小学唱歌集 昭和年用
(一九三二年・昭7)

四、靖国神社
一、花は桜木、人は武士。
その桜木に因みある
世を靖国の御社よ。
御国の為、いとぞよく
花と散りにし人々
魂は、ここにぞ鎮まれる。

二、命は軽く、義は重し。
その義を踏み大君に
命をさげし大丈夫よ。
銅の鳥居の奥の奥に
神壇高くまつられて、
祭は世に残るなり。

● 日本放送協会(現NHK)の「国民歌謡」に歌われた靖国神社

靖国神社の歌
(一九四〇年・昭15)

一、日の本の光に映えて
尽忠の雄魂祀る
宮庭大く燃たり
あの大君のめがけ給う
栄光の宮 靖国神社

二、日の御旗断乎と守り
その命 国に捧げし
ますらふの 御霊鎮まる
あや国民の 拝み給う
いざあし宮 靖国神社

三、報国の血潮に燃えて
散りませし 大和乙女の
清らけき 御魂安らう
あや同胞の 感謝は薫る
格とく宮 靖国神社

四、帝神魂 奉はえまして
千木高く輝くところ
皇国は 永遠に厳たり
あや一億の畏み祈る
守護の宮 靖国神社

※主婦之友社公纂
陸海軍省採定

● 全国戦没者追悼式首相式辞での「みなま」

この追悼式は、1952年5月、59年3月に行われていたが、8月15日に恒例化したのは1963年、池田勇人内閣の閣議決定による。63年は日比谷公会堂で、64年は靖国神社境内で行われたが、65年以降は日本武道館。首相式辞に見えるのは次の言い回し。

戦後の平和と発展・成長は戦没者の犠牲のおかげ。そこには、異境に散った多くのみなまの強き願いがあった。

戦場に倒れられた御霊の御前に思いを致す。貴い命を捧げられた、あなた方の犠牲の上に、いまの平和と繁栄がある。御霊を悼んで平安を祈り、感謝を捧げる。戦没者の御霊の安らかなうんことを。

※多くの場合、理不尽の死、無念の死を遂げた兵士、一般市民の胸中を察お言葉はない。まして、戦争で無数の命を死に至らせた政府・軍部の責任の告白はなく、謝罪の言葉もない。僅かな救いは次の言葉——我が国は不戦の誓いを新たにし、世界の恒久平和の確立に向けて、積極的に貢献していくことを誓います。

[参考] 東アジア教育文化学会企画、又吉盛清ほか著『靖国神社と歴史教育』明石書店、2013年

高橋哲哉『靖国問題』ちくま新書、2005年

田中伸尚『靖国の戦後史』岩波新書、2002年

村上重良『靖国神社』岩波ブックレット、1986年

西川重則『天皇の神社「靖国」』梨の木舎、1988年

7. 諸賛美歌集での「みたま」

- 明治版 もつぱら みたま。御霊はなし。聖霊あり。[例] 136番 父聖子聖霊の
 248番 聖霊のみ
 * 聖書あり。81, 419
- 昭和版 もつぱら みたま。御霊あり。聖書あり。128, 516 ほか 516に みたま
 * 聖書あり。139, 190, 282, 416
- 讃美歌21 もつぱら 聖霊 聖書新共同訳に準拠して「みたま」を排した。み父、み子は用いる。
 “霊”を用いること
 新共同訳では御父を「みちち」とは読まず、「かんちち」と読む。
 [例] 343 [例] 343 聖霊よ、降りて おかしのごとく ← 54年版 499 みたまよくだりて
 代々にわたる 霊の神よ おかしのごとく
- 新生讃美歌 慎重に 御霊を避けた。表記を みたま、み霊、聖霊にしようとした。
 積極的に 聖霊を採用した。霊だけを用いるケースもある。
 [使用回数] みたま/み霊/聖霊=約70回、聖霊/せいれい=20数回、霊/神の霊/神の霊=約10回
 * 聖書あり (470 聖書とみ霊に導かれ (こは聖書と聖霊として欲しかった))
 499 聖書とみ霊に導かれ

⇒ 三一の神を言い表すのに: 父み子み霊 81, 83, 125, 294

父み子聖霊 573, 663 * 明治版136に 父聖子聖霊の ひとりのみたまよ
 父子聖霊 76, 600
 父なるみ神とみ子とみ霊の三一の神にぞ 343
 父子聖霊の ひとりの主を 360
 父子聖霊の主 668
 ちち み子 せいれいの主なるみたまに 674

● 公頌歌 ORTONVILLE での「みたま」

- 明治版、昭和版、1954年版では、句読点の位置の違いがあるものの、父み子みたまのおおみかみに
- 讃美歌21では、父・子・聖霊のひとりの主よ (27) 新聖歌63では
- 新生讃美歌674では、ちち み子 せいれいの主なるみたまに Tr. © 2003 御霊となつてしまった。残念。
- 日本聖公会聖歌集557では、父 み子 聖霊 ひとりの神 (2001年)

● 公頌歌 OLD HUNDREDTH での「みたま」

- 明治版、昭和版、1954年版では、句読点の違いがあるものの、みたまにあふる 父、み子、みたまを。
- 教会讃美歌501 (ジネウラ詩編歌の譜) では、恵みのみ神を父み子み霊を
- 讃美歌21 24 (同上) では、恵みにあふれる 父・子・聖霊を
- 新聖歌60では、御恵みにあふる 父 御子 御霊を おたま
- 新生讃美歌671では、めづるものとなる ちち み子 せいれい Tr. © 1989 ← 1997年の讃美歌21
 に先んじて! 特筆すべき。
- 日本聖公会聖歌集559では、栄光は父と 子なるキリストと
 聖霊なる主に せまに限りなく

* 日本の教会では明治の昔から ORTONVILLE がよく歌われてきたが、諸外国では OLD HUNDREDTH が
 広く用いられている。OLD HUNDREDTH は、日本中で共通歌詞、同一の譜として欲しい。同じ
 こは、NCAEA 聖なる 聖なる 聖なるかな についても言える。この2曲は限りなく重なり。

8. 賛美歌集での「みたま」をどうすればよいか

容易な答えはない。

- 『讃美歌21略解』24番の項では、公領栄 OLD 100+H について、「父・み子・みたま」に代えて「父・子・聖霊」という表現を用いたことが述べられ、「誤解を招く可能性のあった『みたま』は使われなくなりました」と特記されている。(36ページ)「みたま」が死んだ人の靈魂を指すことを考えてのことに違いないが、明治期以来の「靖国」の思想にまで考えが及んでいたがどうか。新共同訳聖書と連動する讃美歌21は、「みたま」を全廃し、聖霊、霊、“霊”とした。ただし、み神、み父、み子は多用する。原歌詞の Spirit, Holy Spirit の別に關係なく (Ghost)

- おおよそ神について尊敬表現を用いるのは当然のこと。避けようとしても避けられない。

【例】新生讃美歌 343番5節 父なるみ神と み子とみ霊の
三つの神にぞ み栄えあれや 「み」×4
573番4節 父み子^{みたま}聖霊に み栄えあれかし
いとりのみ神を 永久にほめまつらん。 「み」×4

- 新生讃美歌の注目すべき試み

- 「ミタマ」と発音して「みたま」「み霊」「^{みたま}聖霊」と記す用例が、計70回を超えるが、「御霊」表記を意識的に避けた。そうすることによって、死んだ人の靈魂への連想を排した。日本バプテスト連盟の長きにわたる「ヤスクニ」問題への取り組みからすれば、「靖国の御霊」への連想を排除した鋭い見識がうかがえる。

- 「聖霊」と書いて「みたま」のルビを振る知恵を働かせた(計10回)。この表記は、実は明治の昔からあった。既に記したが【例】明治36年版 136 父^{みたま}聖子^{みたま}聖霊の いとりのみかみよ

※「み」に「聖子」を充ててみこととお、「^{みたま}聖霊」の整合を図った。

- 聖霊/せいれい の用例が20回を超える。
将来、これを増やす道も。

「^{みたま}聖霊」と「^{みたま}聖霊」の整合も。(既述)

- 「みたま」を全廃することには難しさが伴う。

- 全部を^{みたま}聖霊に揃えたとしても、「ミタマ」の発音が残って、初めて耳にした人に真意を捉えてもらうにくい。なぜ「せいれい」としないのかとの問いが湧いて来る。

- 歌唱の技術面からすれば、「み神」「み父」に並ぶ同じ3音節の「みたま」が収まりやすい。歌詞の音節を音符にどう合わせるかが問題。「せいれい」としたため、音符に合わせるとして、せいれい、せいれい、とせざるを得ないケースがあり、窮屈の感と否めない。歌い慣れたせいれい、せいれい、ただし、671は極めて歌いやすい。674は比べて、1音がなない。

- 日本キリスト改革派教会の『ジュネーブ詩編歌』に「みたま」が用いられている。674に比べて。

143 編8節 恵みの^{みたま}御霊もて 導きたまへや (同歌には、^{みたま}御霊、^{みたま}御旨、^{みたま}御名が出る)

51 編5節 清き^{みたま}御霊、取り去らざる……^{みたま}霊もて保ちたまへ

104 編7節 神は^{みたま}御霊によりて造り、また新たにす